

読書感想文 児童作文 コンクール 入賞作品を紹介します

問 浪江小学校 TEL 024(567)3970
問 津島小学校 TEL 024(567)6860

浪江小学校は、ここ二本松市下川崎で再開して5シーズン目を迎えました。昨年度に津島小学校も再開し、現在2校で子どもたちが学んでいます。今年の新入生は1名だけの入学でしたが、子どもたちは元気に登校しています。

小学校では総合的な学習の時間を活用して「ふるさとなみえ科」を立ち上げ、浪江町の良さを学ぶ機会を充実させています。今年度は、「ふるさとなみえ科」の学習の成果を発表する目的で製作を続けてきた「なみえっ子かるた」が完成し、11月の十日市祭で展示しました。

このような中、先の双葉郡読書感想文コンクールと双葉地区児童作文コンクールにおいて、浪江小の児童が、特選、準特選に入賞しました。子どもたちが読書を通じ、あるいは家庭・学校生活の中で体験・感動したことが素直な言葉で表現されていますのでご紹介いたします。

双葉地区 児童作文コンクール

- 特選 瀬尾 悠月さん(2年)
- 準特選 三瓶 薫くん(6年)



左から 三瓶 薫くん(6年)、佐藤健登くん(5年)、今野笑瑠捺さん(4年)、瀬尾悠月さん(2年)

双葉郡 読書感想文コンクール

- 特選 今野笑瑠捺さん(4年)
- 準特選 佐藤 健登くん(5年)

お話をきかせて クリストフを読んで

四年 今野笑瑠捺^{えるな}

わたしは、この本を読んで、「戦争」についても一度考えてみまいた。戦争は、悪いことをしていない人たちもころされてしまう悲しいものです。なぜ戦争が起きるのか書いてありました。相手をきずつけても、自分の力を見せつけたいのです。自分のほしいものはかならずうばおうとする、自分勝手なことだと思っています。

クリストフも戦争からにげてきて、イギリスに転校してきました。学校に行けなかったので字も書けませんでした。学校の生活にもなれて、少しずつ勉強が出来るようになってきました。

でも、物語を読むことだけは、好きになれませんでした。それはクリストフの大好きなおじいさん、バビが、「お話は読むものではなく、身ぶり手ぶりを使って話す

ものだ。」と言っていたからです。けれども先生は、クリストフが話した戦争の話を、本にしたいと言いました。

「お話は生きているから、本にとじこめちゃだめなんだ。」と思っていたクリストフは、本にはしたくないと言ひ、みんなの前で話することにしました。

するとみんなは、あつげにとられた顔でしんけん聞いていました。クリストフはずいぶんなやみました。戦争でつらかったことを全て本にすることにしました。そうすれば、どんな人でもよその国の人でも読めるからです。

わたしは、震災でひなんをしたので、転校を二回しました。だからクリストフの気持ちはとてもよく分かりました。クリストフはいじめにあつても負けないで友だちを作ろうとしていました。とてもえらいなと思いました。かれの心の中には、大好きなおじいさんの言葉がいつもありました。だから頑張れたのだと思います。

わたしは、たくさんの人に応援してもらいました。これからは、

こまっている人がいたら、気持ち分かって助けたいと思います。また、クリストフのように、震災で経験したことを文字にして、たくさんの人に伝えたいと思います。

今も、戦争は世界のあちこちで行われているそうです。クリストフのような人たちがたくさんいるということ。平和な世界や平和な未来は、わたしたち子どもにたくされているのではないかと思います。だからそのことをわすれないで大人になりたいと思います。

「おまえの心がだめだと言ったことは、してはいけない。でも心がやりなさいと言ったことは、やらなければならない。」これはクリストフのお父さんが言った言葉です。とても心にのこりました。わたしも勇気がでない時には、この言葉を思い出したいと思います。

自分が一番という気持ち、自分さえよければいいという行動が積み重なって、戦争になります。小さい事でも感しやる事が、戦争をなくすことかもしれません。

読書感想文 準特選

ぼくとテスの 秘密の七日間を読んで

五年 佐藤 健登

「ぼくとテスの秘密の七日間」ぼくは、迷うことなくこの本を選んだ。人間は「秘密」という言葉に弱い。ぼくもそうだ。勝手に想像がふくらんでいく。テスは表紙の絵の女子だろう。二人は、自転車でぼっけん旅行に出かけたにちがいない。「楽しい」「わくわく」「どきどき」「スリル満点」そんな言葉がぼくの頭の中にかんざり、二人の七日間にたっぷり期待してページをめくった。

「テッセル島」この物語の舞台だ。海にかこまれた小さな幸せそうな島を思いうかべた。しかし、この島でくり広げられる物語は、島の名前から受ける感じやぼくの想像とは、全くちがっていた。

「何だ。ぼっけんじゃないんだ。」僕の想像はみごとにはずれた。これは十才の主人公サミュエルと

テッセル島で知り合った女の子のテスが、七日間のいろいろなきごをを通して友情を深めたり、家族について考えたりする話だ。

サミュエルはぼくと同じ十才なのに「家族って何だろう。」とか「家族がいなくなったら一人で過ごすようになるから、練習する。」なんて、ぼくは絶対に考えないことを考えている。「ちよつと考えすぎなんじゃないか。」と思った。ぼくは、この考えには賛成できない。家族といっしょにいる間は、みんなで楽しく思い出になるようにすごしたほうがいいと思う。ヘンドリックさんも同じことを言っていた。

この本には、「どく」とか「死」という言葉がたくさん出てくる。ペラのお父さんやカナリヤのレムスの死から、残された人間が感じる「どく」についてサミュエルは本気で考えている。だから「ひとり生きていく練習」なんて、「へん」なことをまじめに言い出したのだと思う。でも、ヘンドリックさんと話をしていくうちに「どく」になれても何の役にも立た

ないときづいていくサミュエル。ぼくは、よかったと思った。なぜかというサミュエルは、頭がよくて何でも本気で真けん考えるしそれはいいことだけど、もつと今の自分や家族との生活を大切に考えた方がいいと思ったからだ。サミュエルの考え方で賛成できたのは、友達としてテスのことを心から心配する気持ちとファーベルさんにテスが子どもだと話したことだ。勇気のいることだと思うけど、サミュエルの行動は正しかったと思う。この本の最後で、テスとサミュエルが歌ったたん生日の歌が印象に残っている。

「命よ かがやけ 生あるかぎり、あなたも わたしも おめでとう！みんなそろっておめでとう！」

大声でうたうサミュエルからは、「家族ってなんだろう。」とか「どくになれる練習なんてき聞や考えは全くなくなっていたと思う。」「じぶんの人生でなにをするかは、じぶんで決めるんだ。」というサミュエル。同じ年のぼくは、「先をこされた。」と思った。

児童作文
特選

わだいのこ、大すき

二年 瀬尾ゆづき

「ドン、コン、ドンコンドコン。ドン、コン、ドンコンドコン。」
今年も、わだいのこのれんしゅうが、はじまった。わたしは、とてもわくわくしてきた。心の中（ようし、やるぞ）と思った。わだいのこを覚えてくれるのは、ふたばせんだんだいのこのよこ山先生だ。よこ山先生は、「せかいのがつきで、一ばん大きな音が出るがつきは、何でしょう。」と問だいを出した。わたしは、もしかしたら、と思った。答えは、やっぱり、わだいのこだった。でも、少しびつくりした。わだいの

この音が一ばん大きいなんて。もっと大きな音が出るがつきがあるとおもったのに。でも、それを聞いて、わたしは、もっとわだいのこがすきになった。
わたしが、はじめてわだいのこを見たのは、おとしのことだ。おねえちゃん、十日市でえんそうしたとき、ステージでたいこをたく小学生が、とてもかっこよく見えた。その時、わたしもやってみたいなあと思った。
そして、きよ年。はじめてバチをもつてたいこをたたいた。「ドーン。」
おもいっきりたたいた。するとバチをつたわって、手がビーンとしびれるみたいなかんじがした。わたしは、このひびく音のかんじが、とてもすきだ。た

いこからしんどうがつたわってきで、とてもわくわくする。それから、みんなでお合せると、とても大きな音からだんだん大きくなる。ところが、みんなの心が一つになっていくかんじがして、すきだ。みんなの心が一つになって、たいこの音が、大きくもりあがっていきのがびつたり合った時、とても気持ちがいい。でも、たいこのれんしゅうは、とてもたいへんだ。それは、手がいたくなるからだ。
「気をつけ、かまえ。」
六年生がごうれいをかけた。わたしはきゅうにきんちようしてきた。

今年、「朝日」というきよくにちようせんする。「朝日」は、よこうちで、今までやってきた「天きよう」とは、少しちがう。よこうちは、足をななめうしろにひらいて、体じゅうをかけて、つよくうつ。
「もっとこしをひくくして。」
とよこ山先生が言った。何回も何回もやり直したので、とてもつかれてしまった。バチをもっている手は、まめができて、うでを上げるのもいやになってきた。
でも、きよ年の十日市のはつびよう会で、わたしたちが、わだいのこをやると、お客さんが、みんなえ顔になったのを思い出した。そして、いっぱい手をしてくれた。わたしはそれが、とてもうれしかった。今年も、十日市はつびよう会でお客さんがえ顔になるように、わだいのこ大すきの気もちがつたわるように、れんしゅうをがんばりたいと思う。

児童作文
特選

世界のエネルギー改善

六年 三瓶 薫

ぼくは、国語の授業で、「未来がよりよくあるためには」について意見文にまとめ、発表する学習をしたので、紹介したい。
ぼくが考えたのは、

「未来がよりよくあるためには、エネルギー問題を改善することが大切だ。」ということだ。

そのためには、電気、ガス、石油などのエネルギーの節約や太陽の光や風の力など、自然の力を取り入れたエネルギーを作ることが大切だと考える。

その根拠としてつぎのような資料がある。インターネットで「世界のエネルギー資源」という資料をみつけた。そこには、「あと数十年でエネルギーがなくなると」という意味のことが書いてあった。具体的にいうと、採掘寿命は、石油が四十六年、天然ガスが六十二年、石炭が百十九年、ウランが六十九年しかもないのだ。

これらのエネルギーは「化石エネルギー」とか「化石燃料」とも呼ばれ、何億年もかかって自然に作られたエネルギーなのだ。これらのエネルギーを人は掘り続け、使い続けている。その工

ネルギーが、あと数十年でなくなってしまうと知り、このままでは地球に未来はないと思った。もし、今すぐに化石エネルギーである、石油・天然ガス・石炭・

ウランがなくなってしまうたらどうなるだろう。電気や火が使えない生活、自動車が走れない生活を想像してみよう。今までの生活が大きく変わり、生きることも大変な世の中になってしまふことを想像するのは難しいことではないだろう。

では、化石エネルギーをなくさない、長持ちさせようためにはどうしたらよいのだろう。それは、みんながエネルギーを節約し、上手に使うことが大切だと考え、実践することである。

しかし、節約とは具体的にはどういうことなのかとか、そうはいっても難しいだろうと考える人もいるだろう。それに対してぼくは、一人一人が日常で使っている電気、ガス、石油などの使う量をこまめに減らして、必要なときに使う努力をすることが節約で、一人一人が意識を持って実行すれば、そんなに難しいことではないと考える。

例えば、電気の節約なら、使っていない電化製品のコンセントは抜いておいたり、夜、人がいない廊下や部屋の電気は消すようにしたり、さらには、消費電力の

少ないLEDの電球に交換するといったことだ。
天然資源は、このまま人が使いつつ減っていく。未来の社会がよ

りよくあるためには、限りあるエネルギーを大切に使うことと、自然の力を使ってエネルギーを作ることが大切だと考える。そして、今のほかにできることは、今あるエネルギーを節約し、上手に使っていくことだと考える。

家族や身近な人にエネルギーを節約し、上手に使うことを呼びかけていきたい。この呼びかけが家族だけでなく、日本全国、さらには世界に広がり、多くの人がエネルギーを節約し、上手に使う努力をしてくれれば、化石エネルギーを一年でも一日でも長持ちさせることができるにちがいない。

しかし、化石エネルギーを長持ちさせることができて、いつかはなくなる日がやってくる。そこで、自然の力を取り入れたエネルギーについて調べてみた。すると、太陽の光や風の力を取り入れたエネルギーがあることがわかった。

はじめに、「水力エネルギー」がある。これはだれでも知っているように、ダムから落ちる水の力や川を流れる水の力を利用してエネルギーを作る方法だ。

しかし、大きなダムを作ると自然環境に悪い影響を与えるだけでなく、お金もすくつかかってしまうのだそうだ。
次に、「バイオマスエネル

ギー」がある。これは木のはい材や生ゴミ、家畜のふんなどを発酵させて出るメタンガスなどを利用してエネルギーを作る方法だ。ただし、大きなエネルギーを作ることは難しいらしい。最後に、「地熱エネルギー」がある。これは、火山から出る水蒸気ガスを利用してエネルギーを作る方法だ。しかし、火山を利用するということで火山がある地域でないと利用することはできない。

このように、自然の力を取り入れたエネルギー作りの取り組みが世界各地で行われているのだが、それぞれに良いところ悪いところがある。

ぼくが大人になったら、エネルギーの研究をして、自然の力を取り入れたエネルギーだけでなく、少ない量で大きな力を発揮するエネルギー、自然環境に悪い影響を与えないエネルギーを発明していきたいと思う。

みんなで世界のエネルギー問題を改善しよう。